新年を迎えて

皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年はとうとう、アメリカのサブプライムローンが破綻し、それを組み込んだ世界中の金融商品に対する信用不安が、世界経済を震撼させた年となってしまいました。世界中のバブルははじけ、総需要は急速に縮小しています。

今更ながら、世界の国々が、一つの船に乗っている事を思い知らされた気がします。一国経済を超えた世界経済の波動の中で、どのような国でもその波から逃れる事はできません。

国内おいては、「派遣切り」などといわれ、派遣労働者の就労打ち切りが進んでいます。この事で、改めて製造業における派遣労働者の多さが浮き彫りにされた形です。日本の製造業も、輸出産業を先頭に急速に生産調整に入りつつあるようです。

社会を覆う閉塞感

また、昨年は秋葉原無差別殺傷事件や個室ビデオ店放火事件、年末の元厚生労働次官テロ事件と従来の日本にはなかったような、血なまぐさく、やりきれない凶悪事件が続きました。これらの事件のやりきれなさは、いずれも犯人が相手を傷つける事だけを目的としているという事です。

今までも自らの利益のために、人を傷つける事を厭わない犯罪は多くありました。しかし、この人たちは、最初から自らの利益さえ、あるいは、生きる事さえ放棄しているように見えるのです。

このような種の精神的閉塞状況は、経済的な閉塞状況と無関係ではありません。社会、経済は爛熟の極みに至っているように見えます。明日の希望が見えなければ、人は自暴自棄な行動にも走る事になります

従来私たちは、経済の発展、社会の進歩を単純に信じてまいりました。しかし、ここに来て、そのような無限成長は神話に過ぎない事を感じ取っています。限られた地球環境の中で、ますます、私たちの居る場は狭くなっているのです。閉塞感が社会全体を覆いつつあります。

組織社会の成立

私は前号の「爽」の中で、現代が歴史の転換点である事、そして、そのキーワードは「組織化」と「情報化」であると述べました。すでに「組織」は社会の隅々まで張り巡らされ、現代ではほとんどの人が何らかの組織に属しています。また、複数の組織に参加している人も珍しくありません。

現代では、人はその所属する組織の力と、組織内における位置によって評価されるのです。その事は、組織に入ってい

代表取締役社長

鈴　木　英　介



ない人には、耐え難い息苦しさを感じさせると思います。

以前にも申しましたが、百五十年か二百年位前には、組織に入っている人の方が少数派だったのです。徒党を組むものは、やくざ者か、宗教的狂信者でした。普通の人々の関係は主従、あるいは親方子方であり、個と個の結びつきでした。我々人類は何千年も「組織」がないか、あってもごく少数の特殊な存在であった時代を生きてきたのです。ですから私たちの中で「組織社会」に慣れない人が居るのは当然の事です。

先に述べた自暴自棄のような凶悪犯罪に走った人は、いずれも組織からはみ出した人だったと思います。また「引きこもり」と言われ、どのような「組織」にも所属しないがゆえに、社会との関係を作れず、外にさえ出られない人たちも居ます。現代では組織に所属しないとアパートを借りる事さえ難しいのです。そして、住まい（住所）を持てない人は組織（会社）に所属する事ができません。つまり、負の循環に陥ります。たまたま、組織からはみ出してしまった人にとって、現代社会は巨大な碾き臼のように感じられるのではないでしょうか。

しかし、私たちはその現代で生きていかなければなりません。また、以前にも述べましたが、組織による生産が、生産力の飛躍的発展をもたらした事も忘れるわけにはいきません。どのような事象にも、光と影はあると思います。影はやり過ごし、光は積極的に吸収していく以外にありません。

情報化する組織

そして、その組織内は情報によって固く結ばれています。組織は情報で編み上げられていると言っても過言ではありません。組織の本質が位階制と権威主義であるとの評価は、表面的なものに過ぎないのです。情報の流れがツリー構造であるというだけの事です。表面的な、形だけの組織は速やかに消え去る運命にあります。現代の競争社会は、そのような形だけの組織が生き残れるほど甘くはありません。

当社がこの組織間競争の時代を勝ち抜いてきたのは、このように現状を分析し、組織の本質を見据えてきたからです。つまり、位階制、権威主義の組織を否定し、柔軟な情報ツリー構造の組織を作ってきたのです。あるいは求められるものは、複数のツリーで構成される組織かも知れません。複数のツリーが重なって、ネットワーク型の組織ができます。現代で成功している組織は、このようなものではないでしょうか。

当社は、情報の流れを円滑にするために、いくつかの規定類、マニュアルも整備してきました。その成果はこれから実を結んでいくはずです。

私たちは否応も無く、歴史に与えられた社会的条件の中で生きていかなければなりません。今年一年、また皆で力を合わせ、勝ち残る組織として、状況を切り開いていきたいと思います。